

環境と共生する住宅

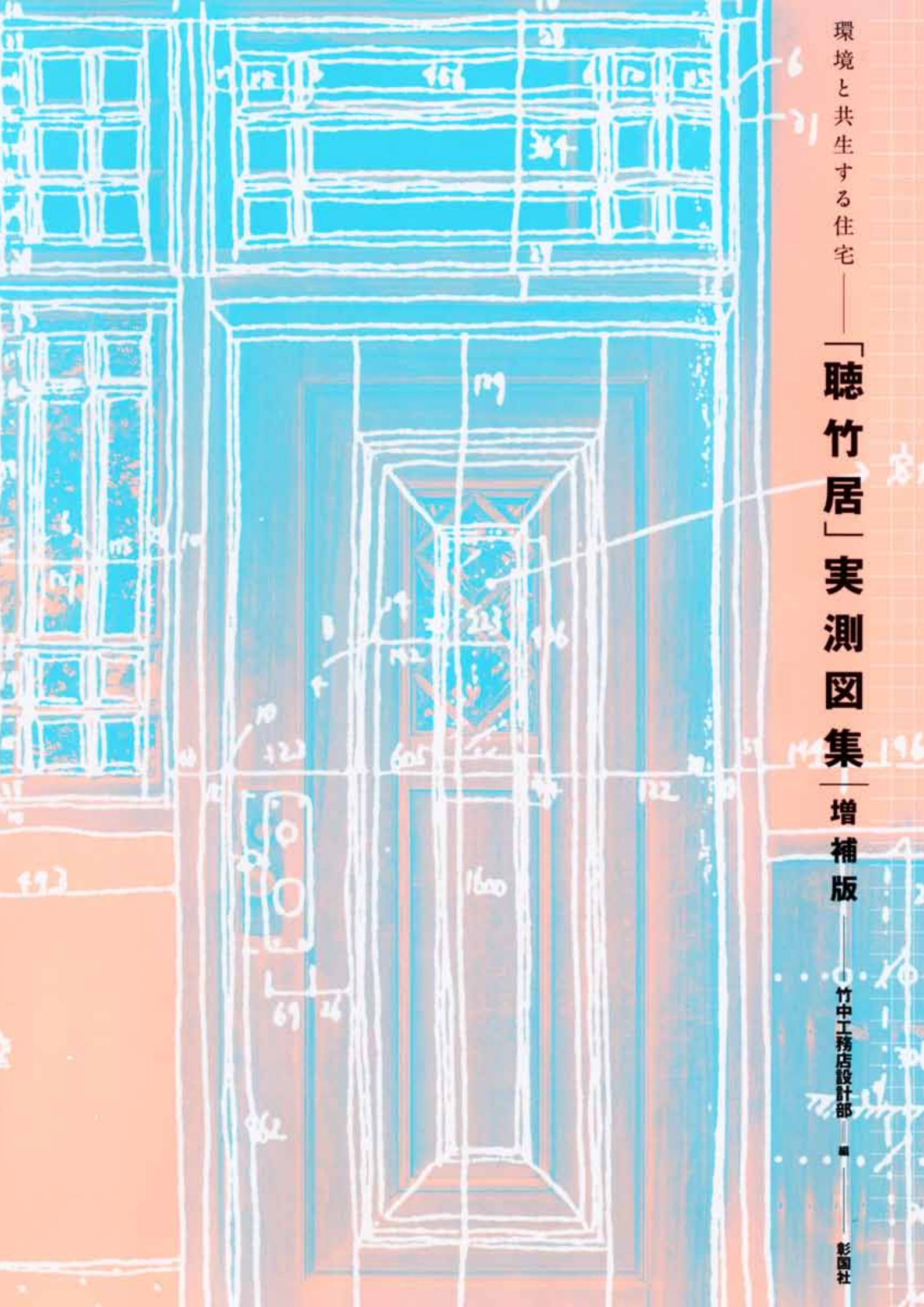
「聴竹居」実測図集

増補版

竹中工務店設計部

編

彰國社



環境と共生する住宅

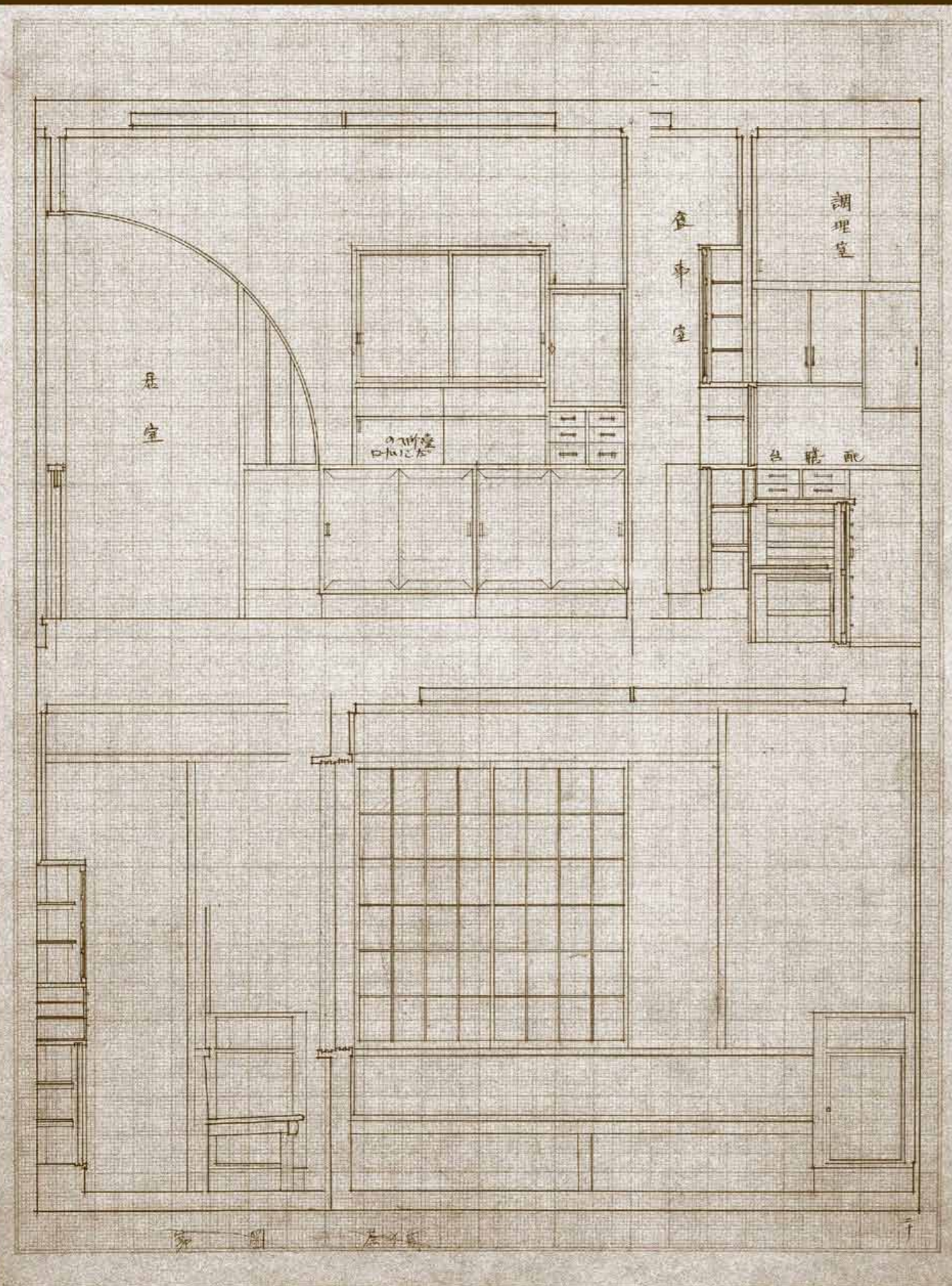
「聴竹居」実測図集—増補版

竹中工務店設計部 編

彰園社







はじめに

京都府大山崎町の天王山の麓に、建築家・藤井厚二の自邸として「聴竹居」(ちようちくきょ)と名付けられた、2018年で築90年になるひとつの木造平屋建ての住宅がある。知る人ぞ知るその名作住宅を、竹中工務店黎明期に在籍した藤井の後輩にあたる大阪本店設計部の有志が、2000年に自主的に実測調査を行った。幸運なことに、実測調査の結果を『「聴竹居」実測図集』として竹中工務店設計部で編集し、翌年の2001年3月に発行することができた。

2008年春からは、「聴竹居」を存続させていくために、定期借家として借り受けて、地元住民と結成した任意団体の聴竹居倶楽部で日常維持管理をしながら一般公開を続けてきた。そして、2013年には天皇皇后両陛下の行幸啓、さらに2016年12月には竹中工務店が藤井家から「聴竹居」の土地・建物を譲り受けた。そして、2017年7月に昭和の住宅としては初めて国の重要文化財に指定された。

「聴竹居」は、環境共生住宅の原点とも言われ、近年は新聞や雑誌、さらにはテレビで取り上げられることも多く、日本全国だけでなく世界各国からも多くの人々が訪れる「木造モダニズム建築」の代表格のひとつになった。今般、絶版となっていた本書が「聴竹居」竣工90年、藤井厚二生誕130年にあたる2018年に合わせて増補版として復刻されることになった。

竹中工務店設計部

藤井厚二(ふじいこうじ)略歴

1888年、現在の広島県福山市に造り酒屋の次男として生まれる。11代続く藤井家は製塩業・金融業も営む素封家で、数多くの絵画や書、茶道具に囲まれた環境で育つ。

1913年、東京帝国大学工学科建築学科卒業。大学では「築地本願寺」などの設計を手がけた建築家・建築史家の伊東忠太に教わり大きな影響を受ける。同年、最初の帝大卒の設計社員として竹中工務店に入社。6年足らずの在籍時に、「大阪朝日新聞社社屋」「村山龍平邸・和館」をはじめ6つの建物の設計を手がける。

1917年、神戸に第一回藤井自邸を建てる。以後、第二回(1920)、第三回(1922)、第四回(1924)、第五回(「聴竹居」1928)と計5軒の自邸を実験住宅として建てる。

1919年、竹中工務店を退社。翌年にかけて欧米を視察し、欧米の最新のデザイン潮流とともに建築設備の最先端にも触れて影響を受ける。

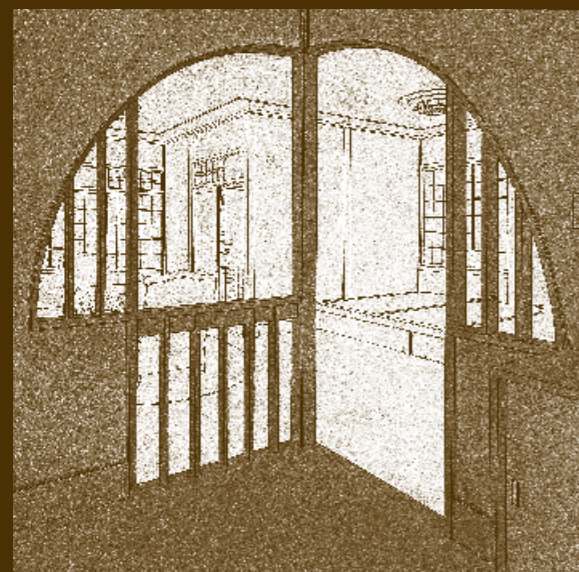
1920年、建築家の武田五一が創設した京都帝国大学工学部建築学科に講師として招かれる。1921年助教授、1926年教授。大学では、はじめ「意匠製図」を担当し、その後「建築設備」「住宅論」「建築計画論」も教える。

1928年、日本の気候風土に合った住宅のあり方を環境工学の観点から考察した『日本の住宅』を出版。1930年には、同書と『聴竹居図案集』『続聴竹居図案集』を1冊にまとめ直して英訳した『THE JAPANESE DWELLING-HOUSE』を出版。

1938年、逝去。遺作「扇葉荘」(1937)まで、生涯で50余りの住宅の設計を手がけた。



聴竹居本屋	002
聴竹居原図	014
—	
はじめに 竹中工務店設計部	021
藤井厚二略歴	021
—	
鼎談 いまなぜ聴竹居なのか 藤森照信×内藤 廣×松隈 章	024
—	
「科学」と「趣味」のはざままで 石田潤一郎	116
一回こっきりの建築 藤森照信	118
「空気環境のバイオニア」 内藤 廣	120
バイオクリマティックデザインの原点、聴竹居 堀越哲美	122
聴竹居に暮らして 小西章子氏・伸一氏からのヒアリング 竹中工務店設計部	126
『日本の住宅』と聴竹居 — 藤井厚二の住宅設計思想 — 竹中工務店設計部	128
あとがき	138
—	
「聴竹居」の実測調査から重要文化財指定まで 松隈 章	140
執筆者略歴	142
—	
藤井厚二作品解説	143
竹中工務店時代の作品	144
独立後の作品	146
全作品リスト・参考文献	148
—	
増補版あとがき	150
写真クレジット	152



● 本屋食事室から見た居室の透視図



● 閑室透視図（「聴竹居原図案集」より）

「聴竹居」実測図	033
実測調査の概要と実測スケッチ集 竹中工務店設計部	034
—	
本屋・閑室 配置図・平面図・断面図	042
本屋・閑室 屋根伏図・天井伏図	044
[本屋]	046
東面外観	046
南面外観	048
西面外観	050
北面外観	052
玄関	054
客室	056
居室	058
家具	062
三疊	064
縁側	066
読書室	070
食事室	072
食事室・調理室	074
寝室1・2	076
寝室3・下女室・納戸	078
廊下	080
脱衣室・浴室	082
便所	084
[閑室]	086
東面外観	086
南面外観	088
西面・北面外観	090
玄関	092
下段の間	094
上段の間	096
次の間	098
便所	100
[下閑室(茶室)]	102
平面図・屋根伏図・天井伏図	102
北面・東面外観	104
南面・西面外観	106
閑室	108
茶室	110
板の間	112
玄関・台所・便所	114

鼎談 | いまなぜ聴竹居なのか

藤森照信 × 内藤廣 × 松隈章
Terunobu Fujimori × Hiroshi Naito × Akira Matsukuma



左から藤森照信（建築史家）、内藤廣（建築家）、松隈章（竹中工務店の各氏）

藤井厚二と茶室

藤森 聴竹居を初めて見たときからずっと、なぜこういうものが生まれたのかが謎だったんですね。というのは、伊東忠太がそうでしたが、インド風の社寺などはヨーロッパの歴史主義と同じように扱えることができるけれど、聴竹居は明らかに歴史主義の延長ではつくられていない。まぎらわしい問題として「数寄屋」があって、聴竹居は数寄屋を近代のなかで放っておけば自ずとこうなるのかなというような感じもあるけれど、でもそういうレベルじゃないと思ったんです。

それと、伝統の問題は、どこの国にとってもそうですが、実に扱いづらい。和風であればずっと数寄屋の大工がいるわけだし、宮大工もいてそれなりにわかりやすいんですが、そういうものではないし。

あと、藤井厚二を考えると、たとえば、「吉田五十八とどこが違うか」という問題がある。藤井厚二、堀口捨己、吉村順三という流れがありますが、これと吉田五十八とはどう違うのか。

そのあたりがずっと謎だったんですが、茶室のことを考えるようになって、解けたんです。要するに茶室によって、彼は伝統的な世界から脱して、ああいう伝統的のようにも見える新しい空間をつくることができたんだと。

一番難しかったのは、数寄屋ってもともとモダンなこと。数寄屋は桂離宮ができた段階でモダンなので、「数寄屋の影響でやりましたよ」というのは、吉田五十八の場合はいいし、村野藤吾もそれでいいと思う。

だけど、どうも藤井厚二の場合は違って、それは何だったんだろうとずっと考えていて、数寄屋ではなく茶室の影響ということ自信をもって言えるようになって解けたんですね——特にあの角の出っ張りのところ。あんなことは世界の建築にはないですね。四畳半の食事室が飛び出している、聴竹居の一番有名なシーン。

内藤 平面的に雁行しているんですね。

藤森 「居室」のこの北側の壁が、この家の正面なんです。なぜかという、マッキントッシュの時計がここにあって、神棚もここにある。そこに食事室が右から飛び出している。こういう構成は世界にないので謎だったんですが、元は残月亭なんだと気がついた。

内藤 藤井はこれが残月亭と言っているんですか？

藤森 いや、言っていない。

内藤 藤森さんの解釈？

藤森 そうです。数寄屋はこういうことをしない。なぜかという、残月亭の上段床は特別な人以外座ってはいけません。

内藤 太閤。

藤森 いや、太閤じゃなく天皇です。太閤が座る床のさらに上段に天皇が座る。

残月亭の原型は、色付九間といって堀口捨己が探し出した図面が残っている。それで、この構成は数寄屋ではやらなくて、茶室だけがやっている。だからこれは数寄屋の影響ではなく、茶室に直接学ぼうとしたということで、吉田五十八と切ることができる。

内藤 吉田五十八は本質を問わない引用だと？

藤森 そうです。

実は、聴竹居のいろんなところに茶室的な納まりがたくさんあるんですが、それは数寄屋でもやるので、茶室固有とは言えない。でも、残月亭の影響を見て、藤井が直接茶室から学んだということが証明できた。

それともひとつ大事なのは、残月亭の空間は建築家を以後縛り続ける。堀口捨己もやるし、村野藤吾もやる。藤井厚二は他でもやる。

内藤 実は半年ぐらい前に、帝国ホテル内にある村野藤吾が手がけた東光庵にある残月床について書いたんです。ここは、残月亭から想を得たと言われていますね。そのとき調べたら、村野藤吾は自宅でもやるし、他の住宅でも何回もやっている。ただ、村野藤吾が面白いのは、その都度挑戦して形をいじっています。東光庵では床を下げて板間にして、フラットにして、奥に洞床をつくり……。

藤森 自邸では床を2つもつくる。

内藤 そう。2つもつくって、とても不思議なことをしている。床から派生する軸線を、幾重にも操作している。あらゆる建築家が残月床をいじっているけど(笑)、やっぱり村野さんは特別ですね。

藤森 その理由は、日本人に固有なことで、要するに部屋の正面に対して斜めに動線力なんですね。これはやっぱりやりたくなるんですよ。

内藤 さらに村野さんは、手前の垂れ壁をうんと下げるんですよ。これだと床を横から覗き込むようになる。

松隈 それは藤井の扇葉荘に近いと思います。

内藤 床から派生するヒエラルキーを、まともには見せない。言ってみれば、一癖も二癖もある意地の悪い空間です。あの空間を理解しようとすると、何かこちらがいじられているような妙な気がしてくる。

藤森 日本人には、対称形に対して斜めが入ってくることによる視線の動きを重視するこの非対称性は日本の伝統的住宅建築の本質なんですね。

ちょっとうるさいことを言うと、世界じゅうの建築はすべて、大事な場所は左右対称です。当たり前ですが。ところが、書院造りが成立する前、寝殿造りがへんな問題を引き起こして、寝殿造りは左右対称にもかかわらず、アプローチは脇からなんですね。そこで混乱が起こる。その混乱は、光浄院客殿などの書院造りの初期のものに見ることができますが、その混乱が要するにいいほうへと向かう。

内藤 なるほど。

藤森 正面を設定しながら、それに斜めや横からこう……。



聴竹居。右側が食事室



残月亭



扇葉荘客間
[出典] 村田治郎「伊東恒治編『扇葉荘』新建築社1940年

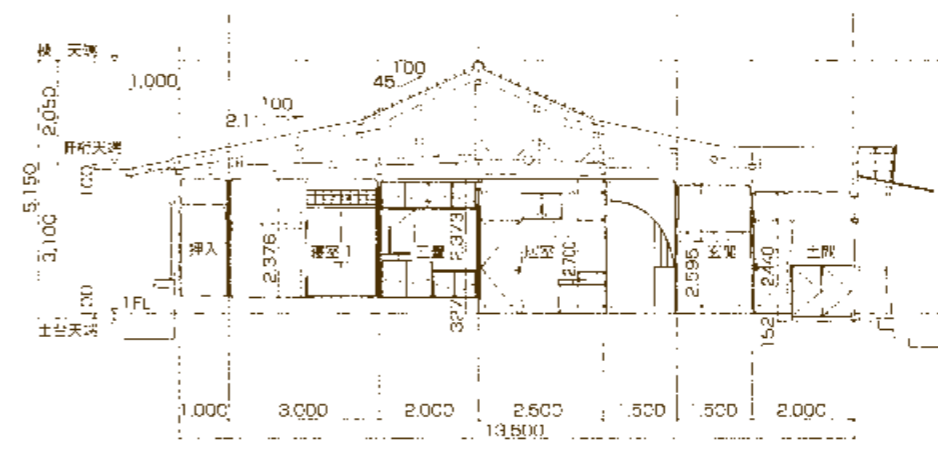
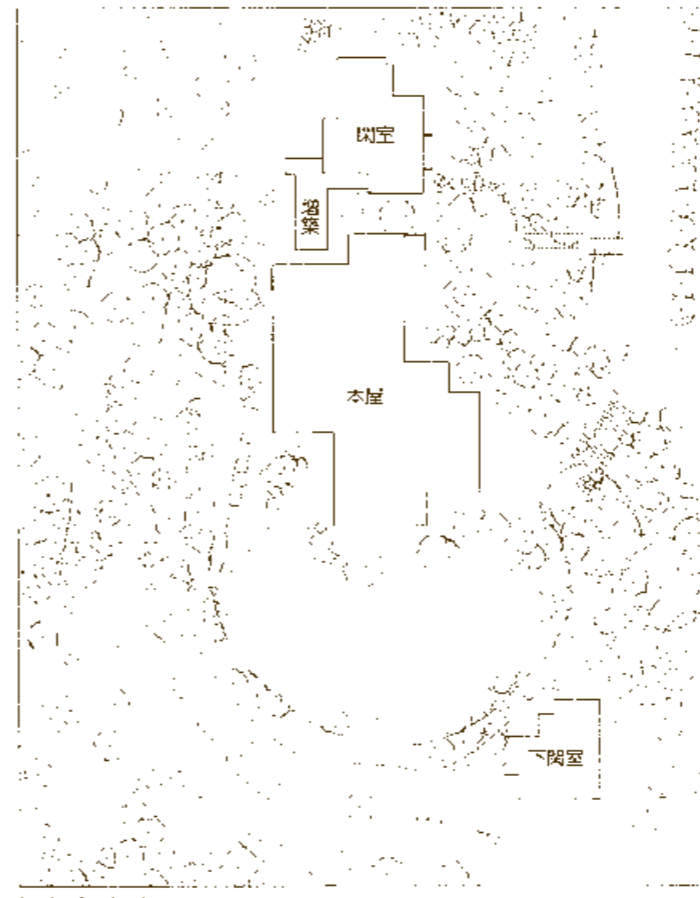
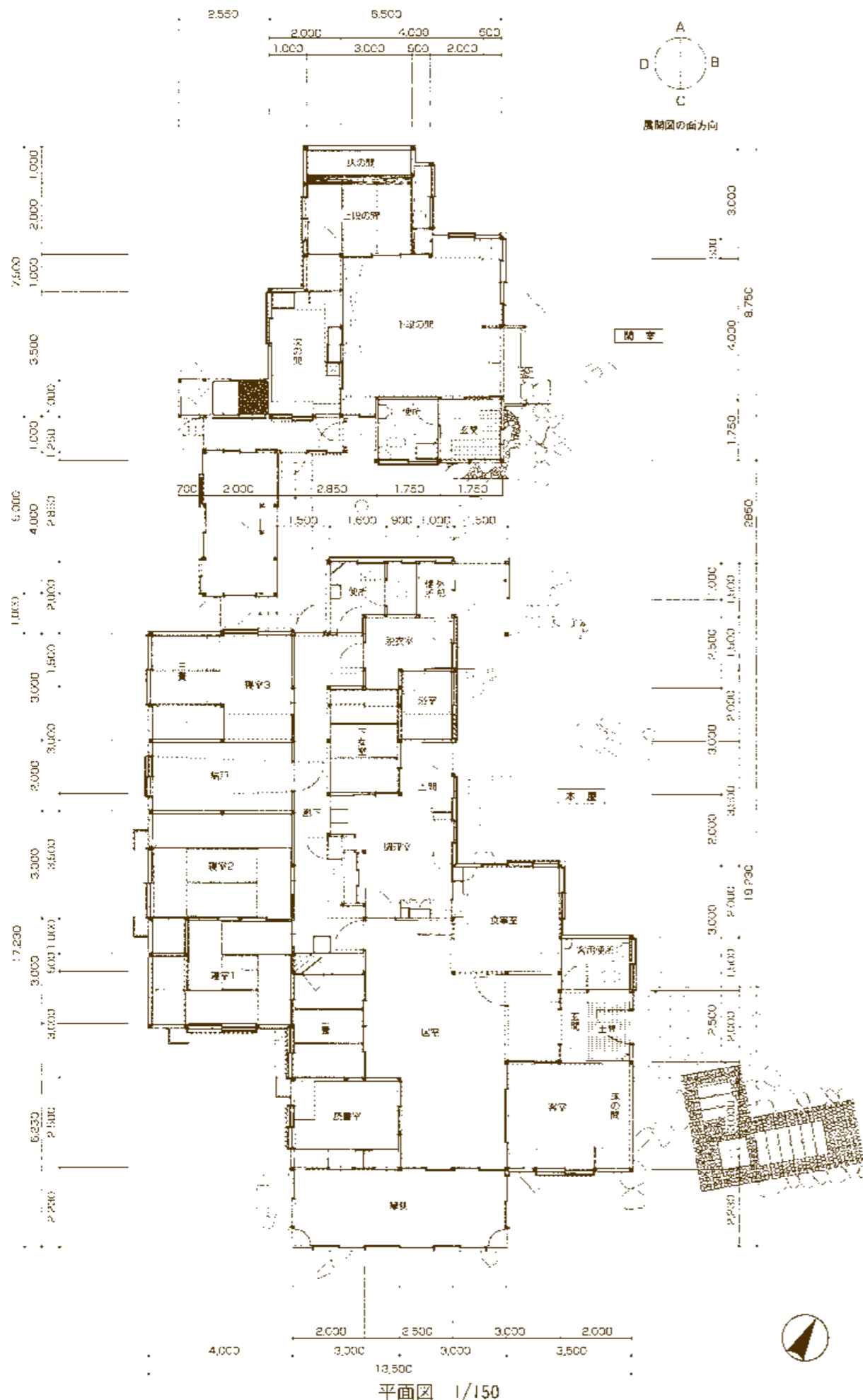
それが最終的には雁行とかになる。言ってみれば、これは室内における雁行みたいなもの。

内藤 写真で見ると「なんていうことない」みたいな感じなんですけど、聚楽第から移してくる前は、床の上に押し上げ窓、つまりトップライトが開いていたんですね。それで、太閤がこの床柱に寄りかかって月を見たので残月亭、床柱を太閤柱というらしい。

藤森 それは利休が死んだあとですね。利休を殺したあと、利休の子の少庵のつくった残月亭へ来て、利休をなつかしんだ。

内藤 いまからでは考えつかないぐらい過激な空間ですね。

藤森 それが藤井厚二の食事室になったという解釈にたどり着いた。彼はやっぱり新しい世界に行きたかった。そ



(解説文注記)
 建物名および室名は原則として下記2~4に掲載されているものを採用した。同じ室名が複数ある場合は編集者にて番号を付した。「下閑室」は下記資料に記載されており、また藤井の記した他の文献からも確定できないため、建物名については通称を用い、その他の室名については編集者にて設定した。

1. 日本の住宅：藤井厚二著 昭和3年・岩波書店
2. 睡竹居図案集：藤井厚二著 昭和4年・岩波書店
3. 睡竹居図案集：藤井厚二著 昭和6年・田中平安堂
4. 床の間：藤井厚二著 昭和9年・田中平安堂

本屋・閑室

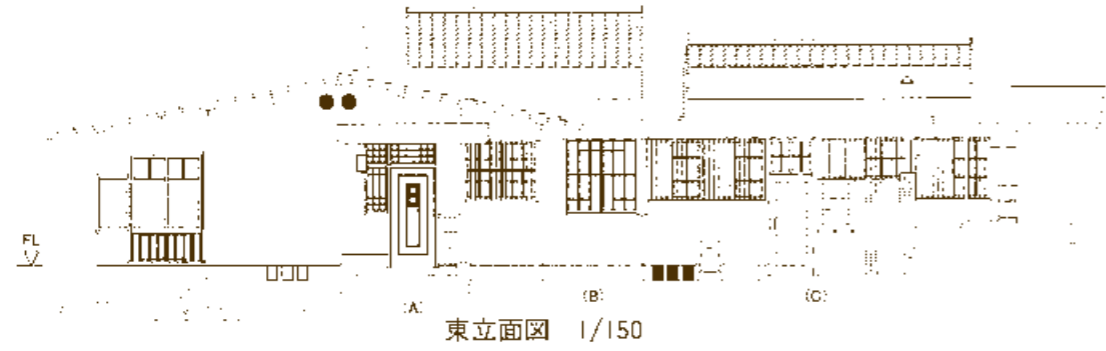
配置図 1/500
 平面図 1/150
 断面図 1/150

昭和3年(1928)春に竣工した「睡竹居」は、第4回実験住宅の南側、尾根筋の南端に位置し、「本屋」と「閑室」の2棟からなっている。また、それとは別に昭和5、6年ごろ、南に少し離れた所にもう一つの「閑室」が建てられている。

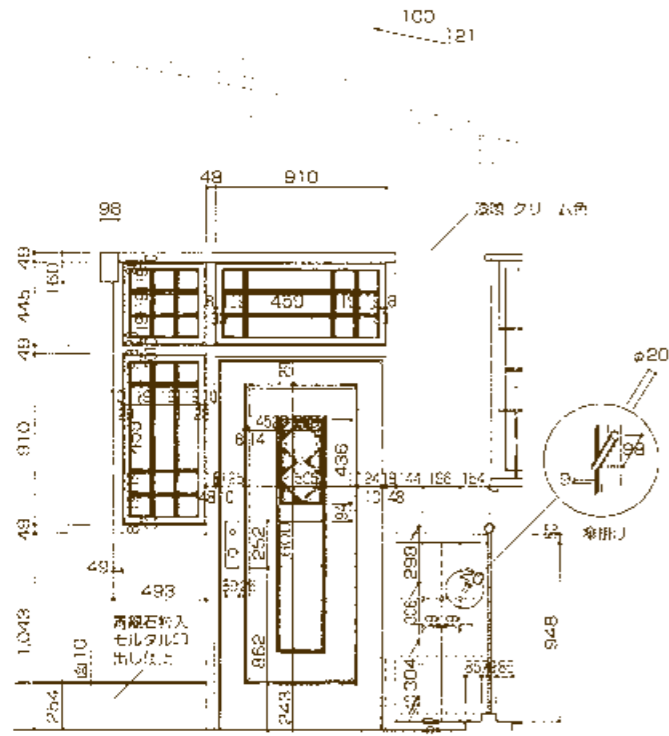
第5回実験住宅「睡竹居」は最後の実験住宅として、全体で約1万坪ある敷地の中でも平屋建ての建てられるいちばん見晴らしの良い場所を選んでいる。1回から4回までの実験住宅において、2階建てと平屋建ての居住経験を通じ、生活の能率性の高さから、平らな場所が少ない敷地にもかかわらず平屋建てを選択したと藤井は述べている。

玄関までには道路から高低差4mほどの石段がある。その石段はゆっくりと右にカーブし、玄関の手前でいったん南側の景色を一望させた後、直角に曲がっている。シーケンスの変化を十分に考慮したアプローチである。

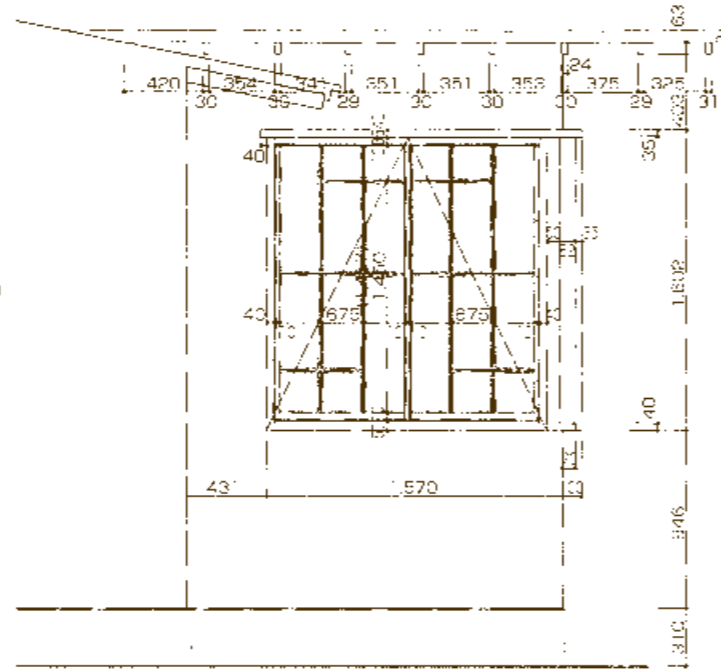
建物は南北に細長く雁行したフランをもつ居室(居間)を中心にして、客室(客間)、食事室、調理室、縁側、読書室等生活の公的部分が配置され、その奥に中廊下にして私的な寝室、浴室、便所、納戸等がある。南北に細長く雁行させている理由の一つは西風の多いこの土地の特徴において、風通しを良くするためである。いま一つは自身の著書「床の間」の中でも述べているが、平面によって区画した種々の凸凹のある空間をつくることによって、四角四面で単調になるのを防ごうとしたからと思われる。周囲は建具だらけで、居室は落ち着かなくなってしまうが、それを中心にした空間の流動性や見え隠れするシーンの面白さを獲得している。玄関に入ってすぐに客室や客用の便所を設けている。それは客の使用部分を可能な限り減らし、家族のための居住空間を大きくとりたいたいの意志の表れである。



東立面図 1/150



開口部立面図(A) 1/40



開口部立面図(B) 1/40



東面外観(本屋)

立面図 1/150, 1/40

玄関回りのデザインの密度はきわめて高く、そのディテールは『聴竹居図案集』にも原寸で載っている。幾何学的な格子割のサッシュはシンメトリーを崩し、虎の支えも向かって右は柱、左は腕木になっており、人をやさしく迎える雰囲気を作り出している。

その腕木の所には、現在は電球となっているが、四角い平面をした照明器具が取り付けられていた。

玄関の右、板張りの所には三つの杉丸太棒が突起している。それは濡れた傘を掛けるために用意されたものである。

調理室の出入口の左には当時としては画期的な今で言うダストシュートごみ捨てが取り付けられている。衛生学にも造詣の深かった藤井ならではの工夫である。

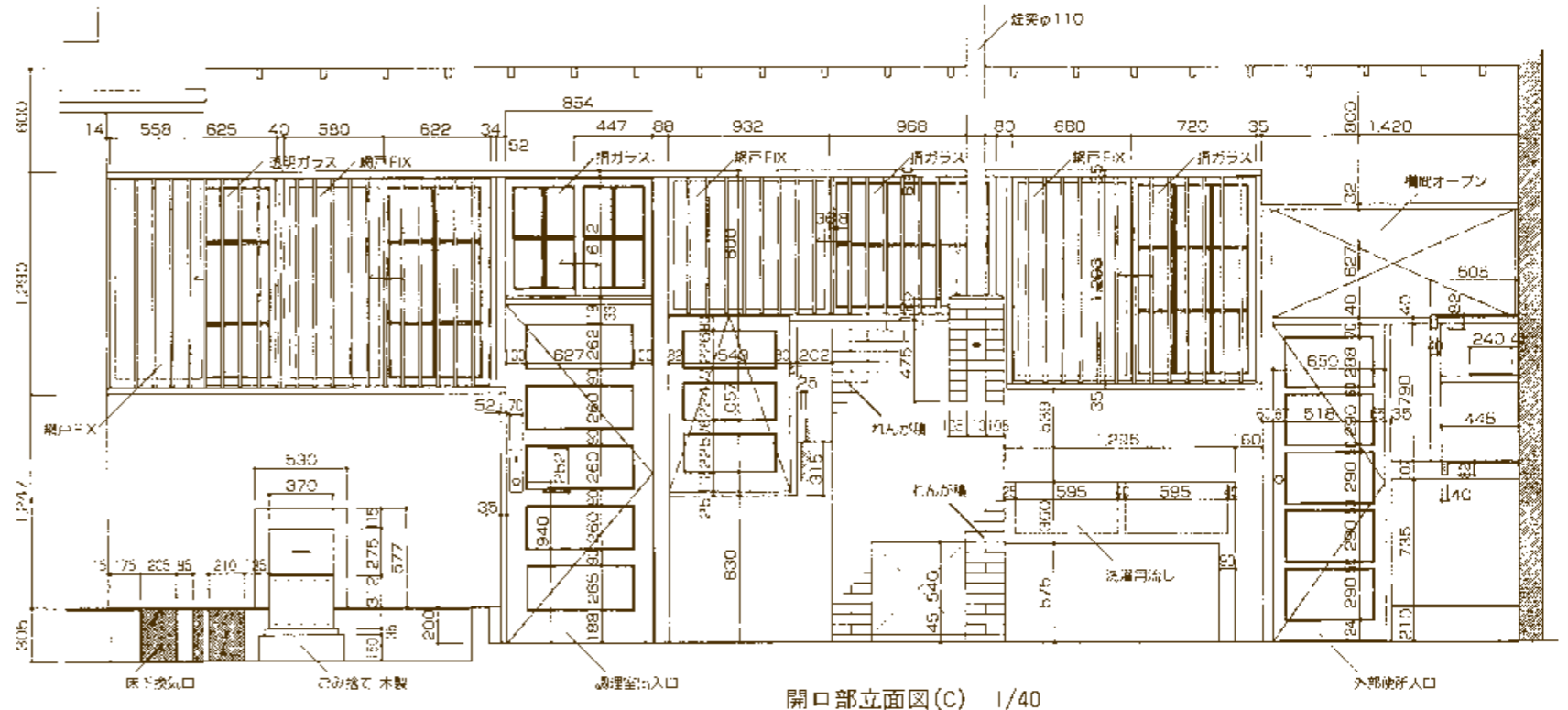
さらに右には木製浴槽を出入れする扉、さらにれんが積みの新を使う湯沸しがあり、洗濯用流し、調理室の流し、浴槽に給湯していた。



スチ



スチ



開口部立面図(C) 1/40